

群馬イノベーションアワード パートナートップ座談会 2

わが社のイノベーション

コシダカホールディングスの腰高博社長ら10人が「わが社のイノベーション」をテーマに、自動化による生産性向上や若手活用について意見を交わした。

鍵握る生産性

出席者

- | | |
|--------------|--------|
| コシダカホールディングス | 腰高博社長 |
| オルビス | 大熊章之社長 |
| 国際警備 | 山崎健社長 |
| NEXUS | 斉藤人志社長 |
| システム・アルファ | 広山武雄社長 |

自動化が「売り」に 腰高



こうしたかみろし。1960年、東京都生まれ。大学を卒業後、父のラーメン店に入社。90年、カラオケ事業に転進し、95年から現職。フィットネスや温浴も手掛ける。海外にも展開中。

挑戦姿勢が成長へ 斉藤



さいとうひとし。1961年、秋田県生まれ。大学を卒業後、飲食業を経てネクサスの創業に携わる。高校、大学と情熱を注いだフエンシングの社内チームから五輪選手を輩出した。2016年から現職。

就業規則に魅力を 大熊



おおくまのりゆき。1961年、旧榛名町(高崎市)生まれ。食肉学校卒業。81年に食肉加工業の大一ミート入社。2000年に同社社長に就任。鳥「フーズ」と合併、オルビスに社名変更し、09年から現職。

業の生産性を上げる、という意味で改革はとんでもない。人手不足の中、人をどうやって採用するか経営のポイントで、自動化やシステム化は「売り」になる。自動算機の導入はカラオケ業界初。先進的」というイメージ

でアルバイトの応募も増えた。店舗の定型業務を自動化するロボットを開発しているところだが、やればよかっただけ競争力がつく。斉藤 新卒採用を始めて15年になる。奨学金を利用する学生の将来設計のため、入社後

に返済支援金を5年間増えた。店舗の定型業務を自動化するロボットを開発しているところだが、やればよかっただけ競争力がつく。斉藤 新卒採用を始めて15年になる。奨学金を利用する学生の将来設計のため、入社後

女性活躍推進活動の一環として女性社員によるプロジェクトチームを立ち上げ、女性がやりがいを持って働ける職場環境づくりに取り組んでいる。大熊 食肉を中心とした生鮮食品やローストビーフなどの総菜を

扱い、生産から小売り、外食まで手掛けている。市場に携わる機会も多く、そのため朝は早いし、時間も不規則で残業が多い。かつての男社会で学生にとってあまり魅力のない企業だった。そこで昨夏から社会保険労務

士、弁護士と話し合っで就業規則を改定した。弊社の営業スタイルは飛び込みでの新規開拓。若い女性を交えた営業職の「かっこよくてスタイリッシュなユニフォーム」で販売力強化に取り組んでいる。山崎 警備の仕事は主に警備員を常駐させる形態の警備業務と、センサーを設置する機械警備がある。社長に就任した当初は売り上げを増やすことばかり考えて仕事を増やした結果、労務費が大幅

にアップした。その後臨時のな仕事に対して「他の警備会社との連携と協力」「労働力の効率化」などを進めたところ業績が改善した。社員一人一人がやりがいや充実感を持って働く姿はかっこいいし、何よりも人手不足を補う力になる。

やまさきけん。1969年、東京都生まれ。大学院で危機管理を学び、修了後に米国留学して3年間、危機管理を研究。97年、27歳の時に国際警備に入社し、2012年から現職。「危機管理のプロ」を自認

こうやまたけお。1943年、浜川市生まれ。81年にシステムアルファを創業。95年、ドコモショップの運営にも乗り出した。現在、首都圏や東日本にも進出中

たが、これまで「フェイク」なイメージで培ったサービスや接客技術を生かせる新たな場として昨年、東京・西新橋にホテルを開業した。新規事業を立ち上げる挑戦の姿勢こそが、会社と社員一人一人の成長に繋がっていることを実感している。大熊 高崎は「豚のほろもん焼き」発祥の地。食の歴史を次世代

に伝えたくて、独自の技術で臭いを抑え、程よい食感に仕上げた「高崎ほろもん」を完成させた。川上から川下まで6次産業化を進め、商圏を広げて生き残りを図りたい。山崎 「社員の家族を最優先に」と社会福祉事業に参入し、ハンディキャップのある子どもたちのための「放課後等デイサービス」は1年半で4カ所に広がった。主軸の警備業は、金融機関のATMが増える中で現金移送業務の依頼がくるなど、効率化のすき間を埋める仕事が増えている。

人手不足こそ勝機

若い力育てる

出席者

- | | |
|------------|--------------|
| クライム | 金井修社長 |
| ファームドゥ | 岩井雅之社長 |
| 共愛学園前橋国際大学 | 大森昭生学長 |
| エイチ・アイ・エス | 群馬営業所 |
| | 五日市一訓所長 |
| サントリー酒類 | 原田芳明広域営業第2部長 |

「やってみなはれ」 岩井



いらい、まさゆき。1954年、旧妙義町富岡市生まれ。大学を卒業後、スーパー「いせや」現「エイシア」勤務を経て、94年に農業資材販売のファームドゥ設立。グループで農産物生産販売、太陽光発電などを手掛ける。

若手の発想を尊重 金井



かない、まさゆき。1961年、沼田市生まれ。群馬富士通勤務を経て、89年にクライムを設立。金融・行政のシステム開発と積極的なM&A(合併・買収)などで事業を拡大してきた。

地域連携で学びを 大森



おおもり、あきお。1968年、仙台市生まれ。大学院博士後課程修了中、96年に共愛学園に入職。前橋国際大副学長を経て2016年から現職。全国の学長が注目する学長ランキング3位(大学ランキング2019)

「やんちゃになれ」 原田



はらだ、よしあき。1969年、京都市生まれ。大学を卒業後、サントリーに入社。西東京支店や市場開発部、営業推進部、仙台支店を経て再び市場開発本部で外食ビジネスを担当

創業精神を次代へ 五日市



いつかいち、かずのり。1984年、盛岡市生まれ。大学を卒業後、エイチ・アイ・エスに入社。個人旅行のカウンター営業を経験した後、2010年に法人旅行事業部へ。16年6月より現職

岩井 農業資材販売から始まり、農産物直売所や太陽光発電事業を県内外で展開している。これからは日本版「アマゾン」で、つまり無人店舗を都内に皮切りに導入するつもり。人手不足を補うため、自動化への対応は避けられない。金井 今、実証実験を進めている静脈認証サービスは店舗の省力化に役立つと思う。認知症高齢者の見守りのため、農産物直売所や太陽光発電事業を県内外で展開している。これからは日本版「アマゾン」で、つまり無人店舗を都内に皮切りに導入するつもり。人手不足を補うため、自動化への対応は避けられない。原田 顧客である外食産業の現場では人手不足が大きな課題だ。作業の自動化と働き方改革は待たない。現状では自動でできない場には自動化できない。時代の変化とどうバランスを取るかが難しい。五日市 全国展開している「変なホテル」は接客などにロボットを導入し、効率化と快

援する場づくりを急ぎたい。このプロジェクトは30代の職員たちが主体となって動いており、10年先のリーダーを育てる実践の場にもなっている。金井 次世代の人材育成は、会社の発展に欠かせない。25年前から新規事業の社内公募を続けているが、若手は常識にとらわれないアイデアを出してくれ。経営側はその発想を否定せず、任せる姿勢を心掛けていく。I-Tの世界では、まだ世の中にないアイデアさえあれば年代に関係なく勝負できる。「ぐんまプログラミングアワード(GPA)」をきっかけに、I-Tの起業に挑む若手を増やしたい。次のビル・ゲイツはこ群馬から生み出したい。岩井 今若手が増え、社員の65%が20代

を信じ、ウイスキー需要はV字回復した。ほかにも社員が好きな理念として、事業で得た利益は顧客や社会に還元するという「利益三分主義」の考え方がある。大森 今の若者は社会貢献への意識が強い。本学は地域連携プログラムが豊富で、学生はそこで成功と失敗を繰り返して社会に役立ち、成長を学ぶ。結果、卒業生の多くは県内に就職するという良い循環が生まれている。五日市 自分は「群馬イノベーションアワード(GIA)」に参加し、多くの出会いから学びと刺激を得た。ネットだけでなく実社会で、一歩踏み出す機会として、GIAを若い世代に広げ、社会現象へと育てていきたい。

だ。以前は離職者に悩んでいたが、チームづくりを学ぶ機会を設けたところ、若手同士で相談し合う環境ができた。次は目標設定の仕方、学ぶ場づくりも考えている。若手は発想はあっても経験が少なく、ビジネスの判断ができない。まずは原資を渡し、実際にビジネスを経験させてはどうか。起業文化を根付かせるには、挑戦を後押しする。最後は若手の感覚

たが、これまで「フェイク」なイメージで培ったサービスや接客技術を生かせる新たな場として昨年、東京・西新橋にホテルを開業した。新規事業を立ち上げる挑戦の姿勢こそが、会社と社員一人一人の成長に繋がっていることを実感している。大熊 高崎は「豚のほろもん焼き」発祥の地。食の歴史を次世代

に伝えたくて、独自の技術で臭いを抑え、程よい食感に仕上げた「高崎ほろもん」を完成させた。川上から川下まで6次産業化を進め、商圏を広げて生き残りを図りたい。山崎 「社員の家族を最優先に」と社会福祉事業に参入し、ハンディキャップのある子どもたちのための「放課後等デイサービス」は1年半で4カ所に広がった。主軸の警備業は、金融機関のATMが増える中で現金移送業務の依頼がくるなど、効率化のすき間を埋める仕事が増えている。

に伝えたくて、独自の技術で臭いを抑え、程よい食感に仕上げた「高崎ほろもん」を完成させた。川上から川下まで6次産業化を進め、商圏を広げて生き残りを図りたい。山崎 「社員の家族を最優先に」と社会福祉事業に参入し、ハンディキャップのある子どもたちのための「放課後等デイサービス」は1年半で4カ所に広がった。主軸の警備業は、金融機関のATMが増える中で現金移送業務の依頼がくるなど、効率化のすき間を埋める仕事が増えている。